

住民の切実な要求に応える建築活動を

「建まち」誌をその接点に

本誌は一九七〇年、新建築家技術者集団の発足と同時に、機関誌「新建築」(季刊)として発刊され、以来五年間十三号まで発行されたあと「住民にわかり易いように」誌名を現在の「建築とまちづくり」と改め「外に開かれた」雑誌として、あらたな飛躍をめざし隔月刊となりました。

設立時の「高度経済成長」期は、間もなく「石油ショック」を経て長期の構造不況の時代へと変わり、建築界も不安と混乱の時期に入ったといわれるようになりました。私たちはそのような中で、経済的には大変きびしい時期ではあるが、住民運動の発展に伴って(私たちが意識的に求めさえすれば)真に住む人、使う人の要求をたたくつかみうる社会的基盤ができたといえるのではないだろうか。それは明治以後の近代建築

の歴史のなかで初めてであり、積極的な意味で転換期ととらえるべきであるという提起をしました。そして多くの建築家・技術者に「使う人、住む人の立場にたち、地域にねぎした建築活動を」とよびかけ、本誌をその建築活動の充実した有効な集約や総括、蓄積の場とすることをめざして、八一年から月刊発行にふみ切りました。

昨年(八二年)十一月、きびしい経済状況が続く中で、新建第十二回大会は成功裡に終わりました。大会では、各地の相談活動など積極的に住民の要求をつかみ解決しようとする努力の経験が報告され、経済条件はきびしくとも、ニューザーの切実な要求をつかみ総合的力量を高めて、従来の枠を大きく越える提案活動、建築活動をすすめれば、建築家技術者の生き抜く展望は切り開かれるとい

う基本方向が、全員一致で確認されました。そのような建築活動の経験を集約し総括し蓄積し、さらにそれを発展させるため、本誌の果す役割りはますます重要となりました。

本誌の今後の基本的努力方向としてなすべきことは、先ず、この一二年意識的にとりくんできた各地の建築家・技術者の実践例の紹介を、さらに充実させることです。建築活動にたずさわっている実務者は、自分の仕事を文章にしてまとめることが比較的不得意ですが、仕事の結果

自体が総括であるともいえます。会員、読者のみなさんには、仕事の結果を集約し集団的に評価することによって、建築界全体に経験が蓄積されていく意味を自覚的に認識して、気軽に、積極的に投稿をお願いします。さらにいえば、それは必然的に研究者の研究発表とは異なるものでしょうが、私たちは、実務家と研究者の共同によるユニークな実践総括を期待します。

本誌の内容について努力したいことの二番目は、専門性と大衆性の総合的追求という点です。私たちは形だけでなく真に使う人、住民の立場にたつ努力を続けていますが、建築にかかわる行為は、経済的事情や建

築家のひとりよがりのせいもあって戦後ますます一般の人たちとかけはなれたものとなっています。現在のよきにきびしい経済状況のなかで、きびしい建築的要求をもっている人びとにたいして、信頼される専門家たり得るためには、専門的な内容をやさしく表現する高度な知識と技術を必要としますが、専門技術者が住民の立場にたつ上での重要な課題のひとつでもあるし、本誌の追求すべき重要テーマでもあると考えます。

三番目には、これまでも部分的には「ニューザーから一言」欄で努力をしてきましたが、ニューザーの眼による建築界への批判、問題提起をさらに強化して誌面に反映させたいと考えています。

「建築とまちづくり」誌は、ニューザーの側にたったニューザーにわかりやすくなじみ深い内容と形式をもった雑誌である、といえるようにしたいものです。本号からタテ書きスタイルに転身したのも、そのひとつの試みです。年があらたまって相変わらずきびしい状況です。今後とも、本誌の発展に会員・読者諸兄の惜しまない力を期待します。